

私は兵庫県の山奥にある明延鉱山の選鉱所として栄えた神子畑という町で生まれ、高校卒業までその町で暮らした。鉱山という天然資源を頼りとしたその町はやがて資源の枯渇と共に閉山を迎え、私の父も生まれ育ったその町を去ることになる。貴重な建造物の一部は今も保存されているが、当時東洋一と言われた選鉱場も現在その姿を残していない。中学生当時の記憶によると、私の住むその町は近隣の人々には別世界のように見えていたようである。確かに中学のあった町からは山あいの道をバスで10キロメートルほど走らねばならず、進むに連れて両脇に山が迫ってくるその景色は誰にもその先に町があることを想像させなかった。更に小学生時代まで記憶をさかのぼると、懐かしい日々がよみがえる。小学校へ通う沿道には選鉱場を支えるたくさんの工場や施設が立ち並び、変電所勤務であった父の所へは、通学路から脇道へ逸れ鉄工所と分析の建物の間を抜けて行った。鉄工所には同級生のお父さんが勤務しており、工場を覗くと決まって声を掛けてくれた。我が町はおよそどこもそんな感じであったが、分析と呼ばれる建物だけは私にとって近寄りがたい場所であった。“ぶんせき”という響きに、私は特別なものを感じていた。“分析”にはそんな思い出があり、当時の分析のことを調べることで何かを書き残したいと思った。そこで父に当時の“分析”のことを尋ねてみたところ、思いがけず、当時そこに勤務されていたN氏が近隣におられることがわかった。私は早速父を通じて取材の申し入れを行い、快諾を得た。御歳79歳、私の母と同じ昭和5年の生まれであった。取材は約1時間30分、分析員として活躍されたN氏のお顔は私の記憶にも残っていた。当時はサンプルマンと呼ばれる役割を経験した人の中から分析員に昇格するのが通例であったが工業高校の化学を卒業されたN氏はいきなり分析員として採用された。新人の頃から研究熱心だったN氏は分析の手法について時折先輩方と意見の衝突があった。それでも正確さ・精度を追求するN氏はやがてその力量を認められ皆から一目を置かれる存在となる。大学でも十分な教育が行われず、国内では書籍も入手が困難な時代にあって、分析の手法は分析員の手探りに頼るところが多かった。あるとき課長が自分の分析手法を記録したノート进行分析室に置きっぱなしで帰った。そのノートを部下の一人が覗き見たが、その内容の凄さに驚き、必死でメモを取った。ノートを忘れたことに気付いて戻ってきた課長は、その部下の行為を厳しく叱責した。分析手法は当時それほど個人のノウハウであり財産であった。そうした状況も次第に全体としての品質管理のあり方に目が向けられるようになり、一流大学出身である課長は自らアメリカの原書を翻訳し課内の勉強会を始めた。やがてその資料は一冊の本となり、大変貴重なものになった。SOP確立に向けた動きであったと思う。そうして皆のレベルが上がってきたがN氏はその分析技術の信頼性の高さから、他部門への支援となると優先的に派遣された。直島の精錬所に出掛けたときのことである。勿論島へは船で渡るが、なんとチャーター船が準備され、島で案内されたホテルの夕食は驚くべき豪華さであった。N氏はそこで始めて様式トイレと対面した。当時分析員はそれほど優遇されていたようだ。出張の目的は精錬所の分析室に配備された原子吸光装置の導入支援であった。そこでヒ素の分析を行った際の出来事であるが、先方の分析員が行うとどうしても繰り返し精度が出せず、不審に思っただけでその手順を観察すると、サンプルを準備した容器の洗浄が不十分であることがわかった。前のサンプルが残留したまま容器を使い回した

ことが原因である。生野銀山においてX線回折装置が導入された際には勉強に出掛けた。また無機分析が日常的な業務であったN氏にとって、柳本のポーラログラフは早い時期から親しんだ機器であったが、同時に柳本への改善提案もずいぶん行い、先方も熱心に応えてくれた。そんなN氏もやがて鉦山の閉山に伴い分析の仕事から離れてゆくが、その頃が正に湿式分析から本格的な機器分析へ移行してゆく過渡期であったようだ。N氏の通った学校では“化学は丸暗記だ”との先生の号令のもと生徒は皆横一列に並んで分子式を問われる授業であったが、覚えていないと棒で頭を叩かれた。「そんな授業も後になってみると分析にはずい分役に立ったが、何より自分は上司や先輩に恵まれた。おかげで分析の仕事で身に付けた様々なことが、分析を離れても大いに役に立った。」と語っておられた。私が34年に亘り歩いてきたFAの世界でもそうであるが、道具が進化してもそれを使う人が基礎的な知識を身に付けていないとやがてどこかで行き詰る。機器分析が主流となった分析の世界においても、検査分析士の精神である「守破離」を忘れてはならないと思う。